子どもの歌唱活動における音楽的成長と価値観の変容

―倉敷少年少女合唱団に着目して―

青　木　彩絵子

（本講座大学院博士課程前期在学）

Changes in Musical Development and Values in Children's Singing Activities: Focus on Kurashiki Youth Chorus

Saeko AOKI

Abstract

The purpose of this study is to clarify children's musical development and changes in feelings and values until they complete learning the music. To elucidate this process, I acted as a participant observer in the activities of the Kurashiki Youth Chorus and they completed a questionnaire survey. The data were analyzed based on the grounded theory approach. As a result, the children's impression of the beginning of the song changed and deepened through their practice process. Through the training process, the children were able to express the inner nature of music and their image of the music in their own words with diversity of expression.

1. はじめに

近年，コンピテンシー重視の授業が展開され，音楽が音楽であることの意義を再考していかなければならないと感じる。音楽を通してスキルを身に着けさせることも大切であるが，音楽を学校教育の中で扱う以上，そのようなコンピテンシー重視の目標のみを掲げていて良いのであろうか。音楽そのものを学び，深めていくことによって子どもにはどのような変容が起こり，成長していくのだろうか。

子どもが自ら演奏し音楽活動を楽しんだり，作品に対する自分の解釈を表現したりするには，演奏の技能や作品を解釈し，音楽を形づくるための思考が必要である。より高度な奏法やテクニック，多様な体の使い方を習得し, 自らの音楽的な引き出しが豊かになっていくことで, 子どもは音楽的な自立へと向かう。そのような子どもは，自ら音楽に親しみ，仲間と共に音楽を奏でる喜びを分かち合うことができ，感動体験を経験する。では，この営みにおいて，子どもが楽曲に出合い，音を取り，表現を追求し，洗練させる中で，どのような思考や行動をとり，子ども自身はどのように変容するのだろうか。また，練習の過程で生じる困難やネガティブな気持ちにどのように打ち勝っているのだろうか。

三橋（2014）は，暁星小学校聖歌隊の練習過程をグラウンデット・セオリー・アプローチを用いて分析し，どのように児童の表現意図が生まれ，歌唱表現が生まれるのかを明らかにした。合唱団のように集団で 1 つの表現を創造していく場合には，問題を発見する過程が重要であり，問題を共有する必要性を見いだしている。桂（2010）は，合唱や合奏の演奏指導を問題にする研究が少なく，表現に関する教授・学習の方法が十分に検討されていないと指摘する。三橋（2016）は，歌唱活動に関する児童の気持ちや価値観が変化していく過程に着目し，活動を継続しようとする意志には，自分の歌唱に対する省察が関連していることを明らかにした。このように歌唱活動における表現の創造過程や指導法について学術的な方法で検討する研究は散見されるものの，音楽科の授業や合唱部の実践記録が多く，歌唱活動における表現の創造

過程や指導法を解明するためにはさらなる研究の蓄積が求められる。また，コンクールを活動目標とした全国大会金賞常連団体に着目して，子どもの歌唱に対する思いや価値観を解明した研究はまだない。そこで本研究では，子どもが楽曲に出会い，演奏を仕上げる過程における音楽的成長，および気持ちや作品への価値観の変容を明らかにすることを目的とする。

2. 研究協力団体

本研究の対象である倉敷少年少女合唱団は，岡山県倉敷市で 40 年の歴史を積み重ね，団員数が 140 名を超える岡山県最大の合唱団である。全日本合唱コンクール県大会金賞・部門 1 位，岡山県アンサンブルコンテスト金賞・部門 1 位，金賞 2 チーム受賞等の輝かしい成績を修め，2019 年全日本合唱コンクール中国大会にて金賞を受賞し，全国大会へと推薦された。また，2019 年には岡山県芸術文化賞を受賞している。幼稚園から高校生までの幅広い年代の子どもで構成される合唱団である。「実力主義で，とにかく良い演奏を。」というスタンスを取っている。合唱コンクールに出場する全国大会メンバーは小学校 6 年生から高校 2 年生の選抜チームである。本研究では，全国大会メンバーに着目をし，調査をしていく。

2-1. 調査期間

2019 年 5 月 11 日（土）から 8 月 12 日（月）の合唱コンクールに向けた練習と本番の期間。

① 5 月 11 日	《その木々は緑》音取り
② 5 月 18 日	《その木々は緑》音取り
③ 5 月 25 日	《その木々は緑》《3rd Scene》音取り
④ 6 月 1 日	《3rd Scene》音取り
⑤ 6 月 8 日	《3rd Scene》音取り
⑥ 6 月 22 日	《その木々は緑》ピアノ伴奏合わせ《3rd Scene》音取り
⑦ 7 月 6 日	《3rd Scene》音取り
⑧ 7 月 13 日	《3rd Scene》音取り，ハーモニーの確認，フレーズの確認
⑦ 7 月 20 日	《3rd Scene》音取り，ハーモニーの確認，フレーズの確認
⑧ 7 月 27 日	《その木々は緑》ピアノ伴奏合わせ《3rd Scene》音取り，ハーモニーの確認， 音色や表現の追求
⑨ 8 月 3 日	《その木々は緑》ピアノ伴奏合わせ 《3rd Scene》音取り，ハーモニーの確認グリスタンド・クレッシェンドの練習
⑩ 8 月 10 日	《その木々は緑》ピアノ伴奏合わせ《3rd Scene》音取り，ハーモニーの確認， 音色や表現の追求

3. 研究の方法

練習の様子をエスノグラフィーを用いて観察し，子ども達への質問紙調査を行う。得られたデータの一部を用いてグランデットセオリーに基づき分析する。

3-1. 分析の方法

分析の方法としてグランデットセオリーを用いる。グランデットセオリーの特徴は，ある特定の場で登場人物たちが演じる役割と相互作用，そして結果として生じる変化のプロセスを『理論』として表現しようとする点にある。グランデットセオリーにおける『理論』とは，概念同士の関連を文章で表したものである。プロパティとディメンションをもとにラベル名を作成し，それらを基にカテゴリー化を行った。そしてカテゴリーを状況・行為／相互行為・帰結のパラダイムに当てはめ，カテゴリー関連図を作成した。

全国大会メンバーは，コンクールでは課題曲と自由曲を演奏する。課題曲では，覚和歌子作詞，横山潤子作曲《その木々は緑》を，自由曲では，鈴木輝昭作曲《3rd Scene》を選曲している。それぞれの曲に対

する初めの印象と練習を積み重ねた後の印象から音楽的成長や価値観の変容を明らかにする。

3-2. 分析過程の例示

①《その木々は緑》の曲に対する初めの印象，②《その木々は緑》の曲に対する練習を積み重ねてきた現在の印象，③《3rd Scene》の曲に対する初めの印象，④《3rd Scene》の曲に対する練習を積み重ねてきた現在の印象，の 4 つの状況に分けて分析を行った。表 1，2 は，カテゴリーを状況・行為／相互行為・帰結のパラダイムに当てはめたもの，図 1 から 4 は，それらを基に作成したカテゴリー関連図である。

表 1　《その木々は緑》のパラダイム

状況	【作品全体のイメージ】 〔作品全体の漠然としたマイナスなイメージ〕 【楽しめないもどかしさ】 〔譜読みの困難さと楽しめないもどかしさ〕 【難しさ】 〔不協和音の技術面での難しさ〕〔リズムの難しさ〕〔難しさと歌えるようになるかという不安〕〔今までに出合ったことのない難しさ〕 〔音程を取ることの難しさ〕〔音程やリズムを取ることの難しさや不安〕〔難しさと不安〕 【作曲家のマイナスな関係】 〔作曲家へのマイナスなイメージ〕	【作品全体のイメージ】 〔綺麗な曲という認識〕〔楽しさと綺麗な曲という意外性〕
行為/相互行為	【難しさの中に良さを発見】 〔難しそうだけれど作品の良い面も感受〕 【視覚的な気づき】 〔視覚的な気づき〕 【疑問】 〔指導者の選択の意図が分からない〕〔作品のイメージと疑問〕 【苦手意識】 〔不協和音の苦手意識〕 【苦痛】 〔練習の苦痛〕	【曲の構成要素】 〔6 部の魅力と綺麗なハモリ〕〔不協和音の中に綺麗な旋律を発見〕〔パートの掛け合いの面白さ〕 〔難しさと曲の構成の分析〕 【身の回りの情景をイメージ】 〔波や風をイメージ〕〔自然をイメージ〕 【おもしろさ】 〔楽しさとリズムの面白さ〕〔パートの掛け合いの面白さ〕 〔難しさの中に面白さ〕 【楽しさ】 〔演奏の楽しさ〕〔難しさの中に歌詞と音のつながりの楽しさ〕〔表現の楽しさ〕 【実体験を通しての感受】 〔疲れる〕〔実体験を通しての感覚〕〔爽快感を実感〕
帰結	【達成感を期待】 〔難しそうだけれど達成感を期待〕	【達成感】 〔達成感を得ている〕〔難しさと達成感の共存〕 【課題】 〔パートの音程への課題〕〔難しさを痛感し目標とする演奏との距離〕〔強弱をつけた時の技術面での難しさ〕 【新たな気づき】 〔かっこよさ〕〔迫力の違い〕〔難しさと感情がある新たな気づき〕

表 2　《3rd Scene》のパラダイム

状況	【作品のイメージ】 〔漠然とした作品全体のプラスな雰囲気の感受〕 【作品のマイナスなイメージ】 〔マイナスな作品全体の漠然とした雰囲気〕	【作品全体のイメージ】 〔作品の部分的なプラスな感受〕〔作品全体の曲想と歌いやすさのプラスな感受〕 【作品との関わり】 作品と自分とのプラスな関わり
行為/相互行為	【細かい要素の気づき】 〔作品全体のテンポや質感の感受〕〔作品の構成要素の認識〕 【伴奏の魅力】 〔ピアノ伴奏の魅力〕 【疑問】 〔疑問に感じたこと〕 【部分的な作品の良さ】 〔部分的な作品の良い印象〕〔パートの良さ〕	【音の響き】 〔音の響きの認知〕 【ピアノ伴奏】 〔ピアノ伴奏の魅力〕〔ピアノ伴奏の魅力と速度記号への課題〕 【迫力】 〔強弱をつけたことによる迫力を感受〕 【表現方法の気づき】 〔表情を豊かにする様々な表現方法の気づき〕
帰結	【歌いやすさ】 〔作品全体の雰囲気と歌いやすさの感受〕〔作品全体のプラスな雰囲気と歌いやすさの感受〕〔歌いやすさの感受〕 【不安や難しさ】 〔言語の難しさ〕〔作品は魅力に感じているが技術面での不安〕 【作品と個の関係】 〔作品と自分とのプラスな関係〕	【表現力】 〔表現の多色化〕〔多様な解釈の感受〕〔自分の言葉で表現〕 【身の回りの情景をイメージ】 〔歌詞や曲想から視覚的なイメージを広げる〕 【課題】 〔表現力をつけることへの課題〕〔歌いやすさと技術面での難しさ〕〔簡単だけれど考えて歌わないといけない〕〔難しさ〕〔細かな強弱の難しさ〕〔技術面での難しさ〕

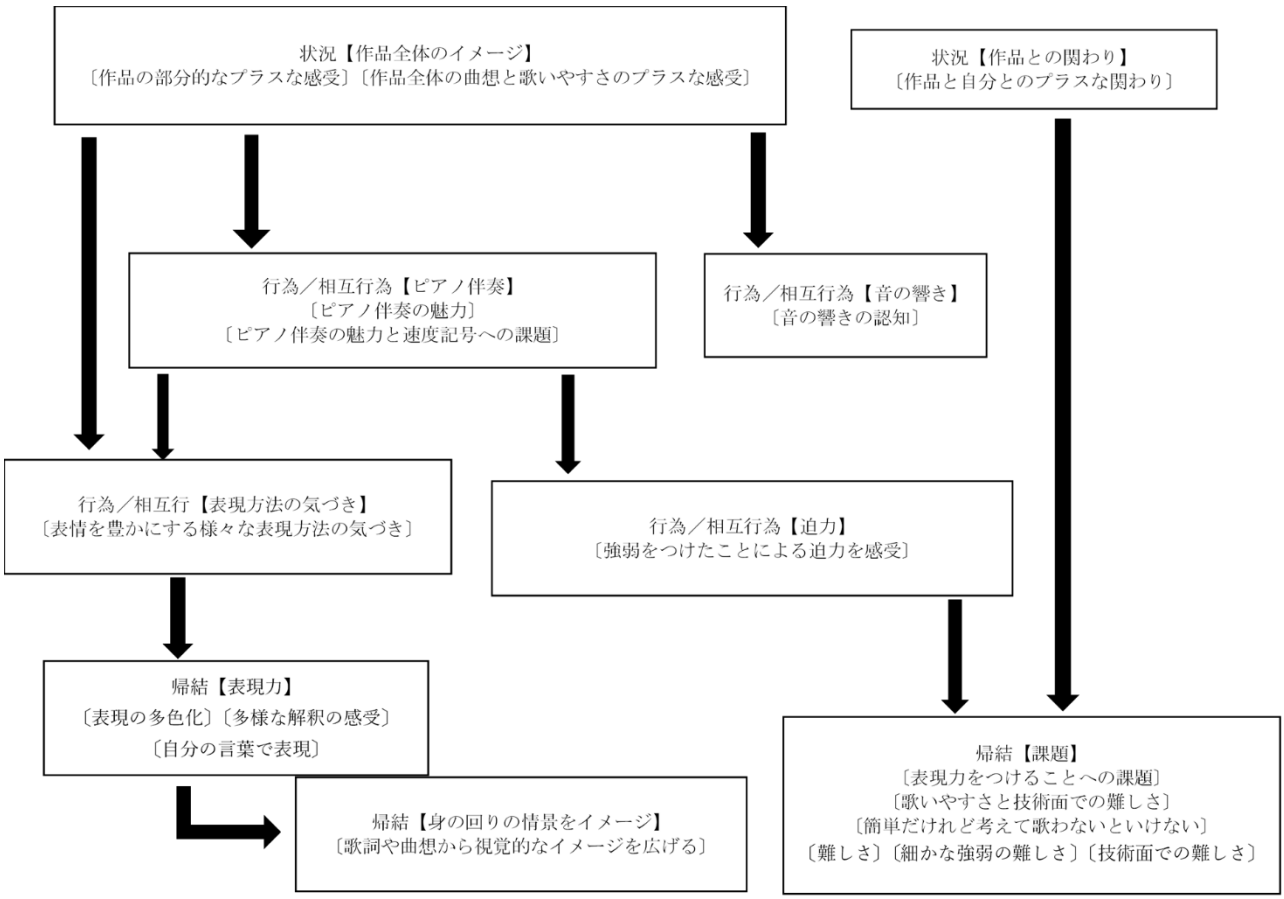

図 1《その木々は緑》の曲に対する初めの印象

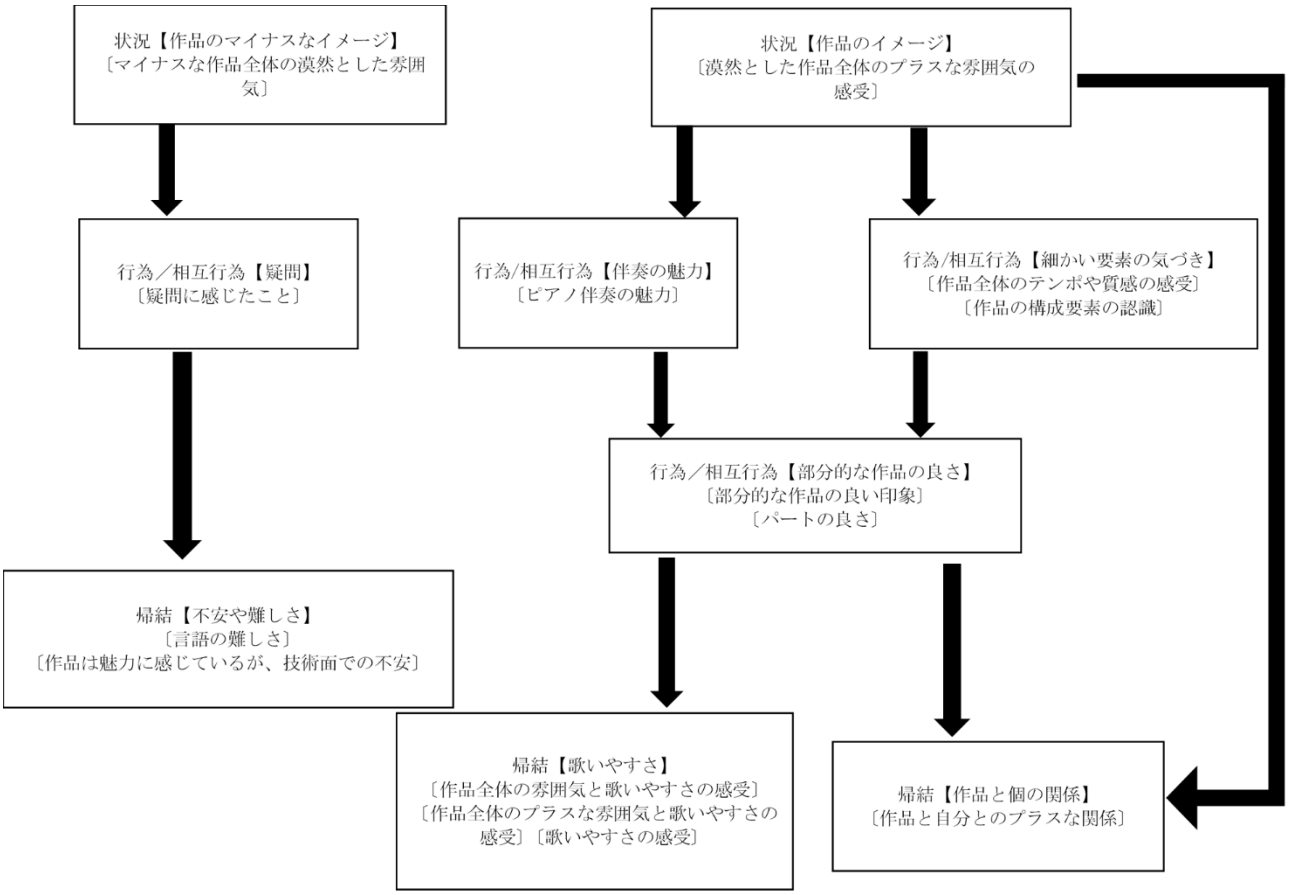

図 2《その木々は緑》の曲に対する練習を積み重ねてきた現在の印象

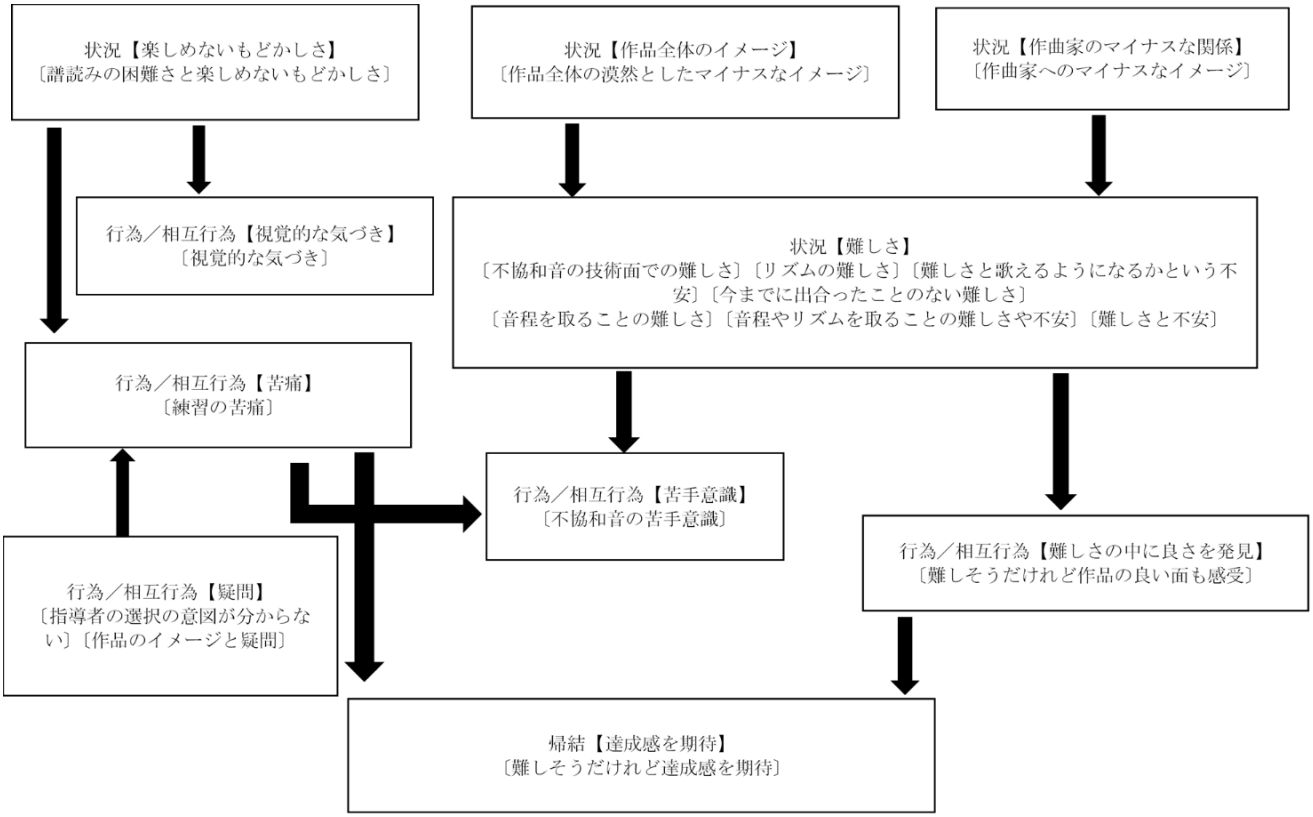

図 3《3rd Scene》の曲に対する初めの印象

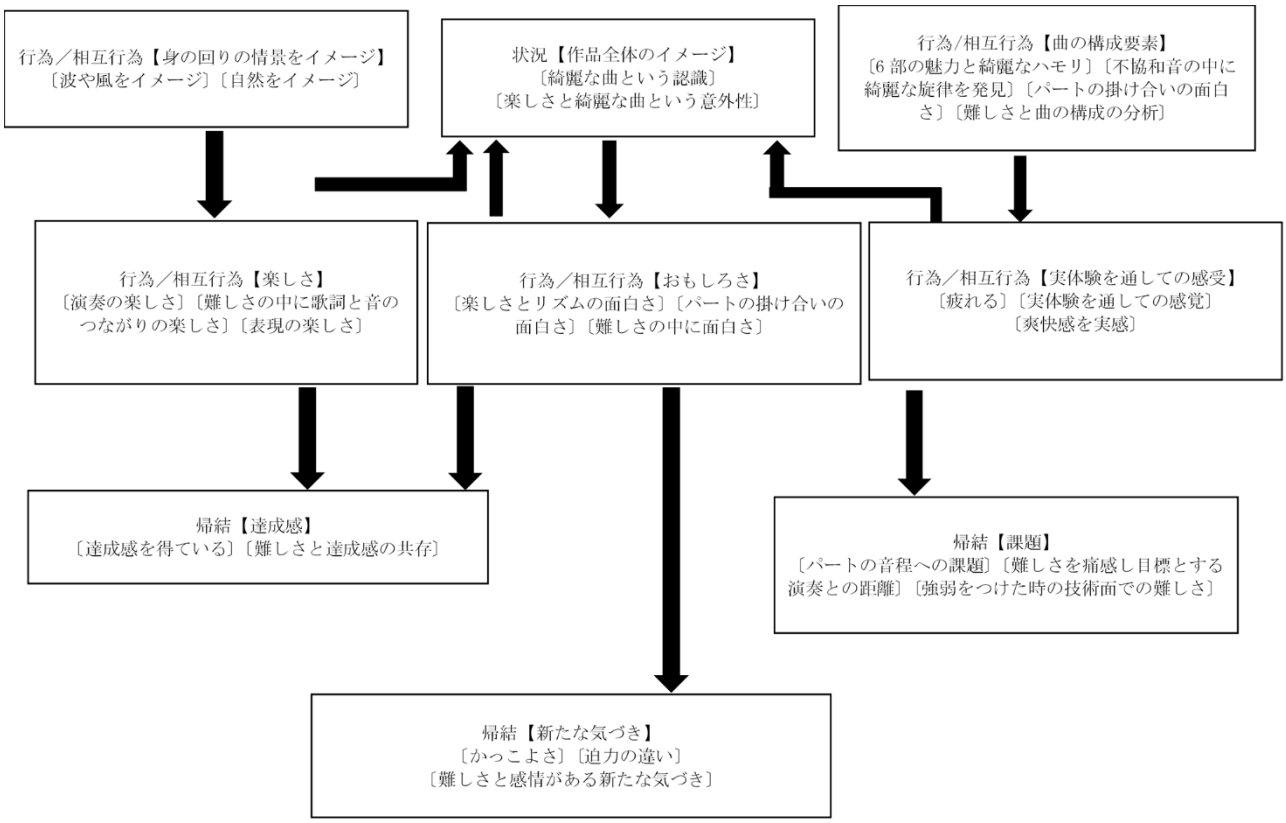

図 4《3rd Scene》の曲に対する練習を積み重ねてきた現在の印象

4. 結果と考察

《その木々は緑》と《3rd Scene》の 2 曲を，「初めの印象」「練習を積み重ねた現在の印象」に分け，それぞれ考察を行った。結果の記述としてカテゴリーを【　】，ラベル名を〔　〕，カテゴリーへの関連プロセスを→で示す。

《その木々は緑》の「初めの印象」は，作品のイメージとしてプラスな項目が多く，マイナスな項目は 1 つだった。〔作品の漠然としたプラスな印象〕から，〔ピアノ伴奏の魅力〕〔作品全体のテンポや質感の感受〕〔作品の構成要素の認識が部分的な作品の良い印象〕〔パートの良さ〕へとつながり，【歌いやすさ】や【作品と個の関係】へと帰結している。そして，「練習を積み重ねた現在の印象」は，〔作品の部分的なプラスな感受〕〔作品全体の曲想〕と〔歌いやすさのプラスな感受〕から，〔強弱をつけたことによる迫力を感受〕〔表情を豊かにする様々な表現方法の気づき〕へとつながり，さらに，〔表現の多色化〕〔多様な解釈の感受〕〔自分の言葉で表現すること〕に発展している。そして，歌詞や曲想から視覚的なイメージを広げ，〔表現力をつけることへの課題〕〔歌いやすさと技術面での難しさ〕〔簡単だけれど考えて歌わないといけない〕といった【課題】意識へ帰結している。

《3rd Scene》の「初めの印象」は，作品にマイナスのイメージを抱き，〔譜読みの困難さ〕と〔楽しめないもどかしさ〕を感じていた。そして，〔不協和音の技術的な難しさ〕〔リズムの難しさ〕と，〔歌えるようになるかという不安〕〔今までに出合ったことのない難しさ〕〔音程を取ることの難しさ〕〔音程やリズムを取ることの難しさ〕や不安から練習の【苦痛】へとつながっている。しかし，〔難しそうだけれど作品の良い面を感受〕している項目もあり，それらが，難しそうだけれど【その先の達成感を期待】し，帰結している。そして，「練習を積み重ねた現在の印象」は，〔綺麗な曲という認識〕〔楽しさと綺麗な曲〕という意外性から，【身の回りの情景をイメージ】【楽しさ】【おもしろさ】【実体験を通しての感受】へとつながり，〔難しさと達成感の共存〕〔パートの音程への課題〕〔難しさを痛感し目標とする演奏との距離〕〔強弱をつ

けた時の技術面での難しさ〕といった【課題】や〔難しさのなかに音と言葉のつながりに感情がある〕【新たな気づき】へと帰結している。

この結果から，曲の初めの印象は練習過程を経て変容し，深化していると捉えられる。指導者は質の良い音楽をするための技術的な指導や指摘が多かったが，その練習過程を経て子どもたちは，音楽の持つ内面性や楽曲のイメージを自分の言葉で表現することができ，表現の多様性を感じることができていた。

以上のことから，個や全体の状況を把握し，課題を見つけることができるようになった点と，楽曲の構成要素を理解するようになった点に音楽的成長が認められる。また，楽曲を理解し深化させ，楽曲の構成要素を理解することを通して，自己と楽曲との関わりがより良いものになっていくという価値観の変容が認められる。

5. 終わりに

本研究では，子どもが楽曲を仕上げるまでの音楽的成長，および気持ちや価値観の変容を明らかにすることができた。しかし，指導者の言葉との関係や個に焦点を当てた変容を見ることができなかった。今後は，音楽そのものを学ぶ過程で個としてどのような変容が見られるのか明らかにしていきたい。

引用・参考文献

桂直美（2010）「教室空間における文化的実践の創成アンサンブルの授業における教師と子どもの音楽の生成」『質的心理学研究』第 9 号，pp.153-170

戈木クレイグヒル滋子（2016）『グラウンデッド・セオリー・アプローチ：理論を生みだすまで』新曜社

三橋さゆり（2014）「児童の歌唱表現における問題の発見と共有：グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく歌唱活動の分析を通して」『音楽教育学』44 (2)，pp.1-12

三橋さゆり（2016）「児童の歌唱活動における継続と省察の関連：歌唱活動に対する児童の気持観の変化に関する分析を通して」『音楽表現学』14，pp.1-18